
黙示録

フェニックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黙示録

【Nコード】

N2520BA

【作者名】

フェニックス

【あらすじ】

人間の心を守るカオス軍。巢食うソーサラ軍。それはカオス予備軍の学生の物語だった。

南条 列。通称、烈火のシャクヤ。兄、隼人。通称、シルバーオックス。列の恋人であり幼馴染みの祐希みずほ。通称、水虎のキヨウカ。同じく幼馴染みのパトリック・レッドガー。通称、鋼のトウゴウ。

彼らは学園と人間の心の世界を行き来する。

ある日、廃墟となった病院の医者的心をソーサラー軍に占拠された。一夜にして崩壊した病院。医者的心に介入したカオス予備軍に待っていたのはかつての同僚がソーサラー軍の毒素で変わり果てた姿、夜叉の死神だった。

死神は死神四天王をたずさえ、シャクヤ、シルバーオックス、キョウカ、トウゴウに決戦を要求するのだった。一回戦、シャクヤ対デット ナイト。ナイトの正体はシルバーオックスの師匠、ムーンドゥースだった。新しい必殺技を携えたシャクヤはムーンドゥースの修行を終える。二回戦、キョウカ対デット ワイパー。圧倒的な力に屈するキョウカ。それを見たシャクヤは乱入し二人の絆で打ち倒す。一応、反則負けだったが、勝負は1対1。最終戦はタッグマッチを要求され、シルバーオックス、トウゴウ対デット モンク、メイジ組だった。モンクは魔法で身体能力を強化し、メイジはトランプのカードを使う。かつて無い戦いにムーンドゥースはメイジの正体を暴こうと四人の戦いを見る為、駆けつけるのだった。

黙示録

ムーンドゥースはデットメイジの正体をなんとなく掴んだ。彼は、ちょうどこの世界が人間の心を監視し始めた頃の戦士の末裔だった。だが、シルバーオックスと鋼のトウゴウは知らなかった。

「さて、どうする？ トウゴウ。今の所、奴はノーダメージだ」「わからない。彼のような能力は解析できないんだ。その場に合ったカードを召喚する。シルバーオックス。もし彼が本当にカードのデイラーなら心理戦が有効だ。デイラーは精神が揺らいだ時、ミスを犯すと言う」「精神が揺らいだ時？ 例えば相手より強いカードを出した時とか？ だが俺達は召喚カードなど使えんぞ」「ジャックの驚で対空攻撃。クイーンの熊でガード。エース騎士で攻撃。……………今出したカードで何が出来る？ 逆利用できそうなカードは？」

「ヒョヒョヒョ……………なあメイジ。そろそろチェンジしようぜ。あきちまう前にな」「モンク。まあそう焦るな。奴等も動揺してるのさ。あのムーンドゥースは気づいたらしいがな。ナアお師匠さんよ。そろそろ教えてやんなよ」

「ムーンドゥース師匠。彼は何者なんです？」

ムーンドウースは腕を組み静かに話した。「…………メイジ。君は我々の心が読めるらしいな。…………シルバーオックス。我が弟子よ。よく聞け。人は過去を忘れたがる。そこに秘法があるからだ。彼は何者なのか？私の推理が正しければ彼は今から1万年前の戦士の末裔。滅んだはずの古代文明の末裔。彼らの能力は今の科学でも解明出来ない部分がある。あくまでも臆測の範囲だが…………」『正しいさ。その推理は。俺の名はファウストのメシア。この世界の創始者の末裔。死神は利用したに過ぎない。我々は滅んだ訳ではない。人間の精神の世界に幽閉されていた。それを掘り起こしたのが死神。ただ、それだけだ』

「死神！お前はなんて奴を解き放った！」「申し訳ございません。夜叉の鴉様。そんな事とは知らずに彼のトリックにかかり…………」『言い訳は無用だ！私はスパイダー様にご報告をする！お前は見届けるのだ！』「…………ハア。すいません」

「ヒョヒョヒョ。そいつぁーすげーや。俺もやり合いてえなあ」「構わんが。どうせお前も死神四天王などで収まる器ではあるまい。私も自分の実力がどこまで通じるかわからないんだ。特別サービスをしよう。キングカード オープン！」メイジはモンクと死神にキングカードを投げた。

「なんだ？何も出てこない。失敗か？」

「……………シルバーオックス。鋼のトウゴウ。私もタッグを組みたい。どうだね？君らさえ良ければだが……………」

「ンンン……………アノ……………すいませんが……………ナゼ僕はここに？」 「ン？お前の名は？」 「僕はエドワード・スカイ。アノ……………この鎖鎌に黒装束。……………何ですか？コレ」 「……………私はシルバーオックスの師匠。ムーンドウスだ君は……………カオス軍かね？ソーサラー軍かね？」 「カオス軍に決まってるじゃないですか！それよりココ、どこですか？それにシャクヤ先輩にキョウカさんが倒れてる。何してるんですか？回復を急がないと」 「死神……………何も覚えて無いのか？何も」 「死神？僕はエドワード・スカイですよ！誰ですそれ？」

「シルバーオックス。聞け！死神のソーサラーの呪いが解けた。そのカードは」 「浄化のキング。私からのプレゼントさ」 「って事は……………モンク。お前」 「あんたらカオス予備軍だろ？なら俺の仲間さ。空いてるんだろ？隣。俺もやるぜ。良いだろ？」 「……………ど

うする？ トウゴウ」 「浄化したなら大丈夫じゃないか？ 戦力も必要だ。頼めますか？ モンクさん」 「あのよ、ソノ……… モンク？ なんかねーのか？ 他に言い方」 「ジャーお名前は？」 「そーだなー」 「何でも良いがシェオロン。一応、俺もファウストな。ヨロシユー」 「君も幽閉されていた。そうかな？」 「まあな。いずれそのメシアともケリをつける日が来ると思いながら1万年。カー根性ワリーナー俺は。まあ良いか？」 スーッと息を吸い込み気合いを入れる。「ヨッシャー！ ファウストのシェオロン！ コレより貴公等を援護する！ 心セヨ！」

「死神。良いのか？ …… って……… いなかったな」 「ダーカーラー！ ムーンドウースのお師匠様。死神って誰なんです？ 手伝って下さいよ。二人の回復」 「二人、驚くだろうな。また倒れなきや良いがな」 トウゴウは笑った。「さて、役者は揃ったな。1対5。ウチ二人は戦力にはならないから、引いて3だ！」

続く

黙示録 その2

デットメイジ。彼は1万年の時を越え人間の精神に幽閉された戦士、ファウストメシアだった。同じく幽閉されていた戦士がいた。ファウスト シェオロン。彼はシルバーオックス、鋼のトウゴウの元に歩み寄る。

「へ？ 僕が彼らを解き放った？ ……そうなんですか？ すいません。全く覚えて無くて」 「イヤ。良いんだ。エドワード。戻っただけでも大収穫だ」 「そうですね。一応、ソーサラーみたいだったですから。僕は」 「気にするな。今はカオス予備軍。そうだろう？」 「受け入れて頂けるなら。学園長。どうです？」

「ザーザー……良かろう。エドワード スカイ。これより援護に向かえ！ 今、衛生士を送った。こちらから信号を送るより直接、行った方が効果があるからな。頼めるかな？ エドワード スカイ。ファウスト シェオロン」

「ハイ。ありがとうございます」 「充分、活躍させてもらうぜ」

「スパイダー様。ご連絡があります……………」
「ナニ？夜叉の死神が黙示録を解いた。……………鴉よ。案内しろ！ワシも出る。丁度良いではないか？我が息子、双子が黙示録を連れてきた。樹は熟した。大輪の樹に果実を実らせて。コレを逃す理由もない！出立の用意を」

「スノ……………スノ。失礼しますの。ハラハラ！大変ですの！お注射ですのー！」
「……………スノちゃん？スノちゃんか？……………来てくれたのか？」
「それだけでは無い」
「アッ……………貴方は。先生。アカデミック カイザー！」
「生徒を送り出すのが教師の仕事だ。二人の回復は我々に任せて行け！エドワード！彼らに加勢しろ！」
「ありがとうございます。先生！」
「忘れ物だ。受け取れ」
「僕の武器。忍者カゲツの」
「ウム。変身だ！早く装着しろ！」

「アカデミック カイザー。1つ勉強させて貰ったよ。カオス予備軍の絆を。我が弟子、シルバーオックスや少年たちの夢の道を。彼らの力はソーサラー軍を越える。良き弟子を持ったなお互いに」
「ムーンドゥース。我々の出番もくれないそうですね。引退ですかな？」
「フフフ。歳はとりたく無いものだな。どうだね？コレが終わったら一杯やらんかね」
「喜んで。期待してますよ。ムーンドゥース」

「忍者カゲツ！装着！」ガシユッ

「おかえり。カゲツ。待っていたよ。よく戻って来た。サア。行こう！」「ハイ！トウゴウ先輩！」トウゴウは手を差し出す。その手をしっかりと握るカゲツ。

「ヨオ。出戻り。もう放すなよ」「シルバーオックスさん。わかってますよ。一度地獄を見ますから」「頼むぜ！相棒」シェオロンとカゲツはリングサイドについた。「シルバーオックス。バックアップは任せろ。俺達がいる」「アア。行くぞ！メシア！」「話しは終わったかね？君達。なら、ゲームを続けよう」「メシア！必ず揺さぶってやる！貴様のその自信を！今日でカジノは閉鎖だ！」

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2520ba/>

黙示録

2012年1月8日08時52分発行